

横也。たつてんは縦也。王と申^す黄帝中央の名也。天の主・人の主・地の主を王と申^す。隱岐^{おきの}法皇は名は国王、身は妄語の人、横人^{おこ}也。権大夫殿は名は臣下、身は大王、不妄語の人、八幡大菩薩の願^{ねが}給頂也。二世の經の正直と申^すは、爾前七宗等の經・論・釈は妄語、法花經・天台宗は正直の經・釈也。本地は不妄語を經て二月十五日申^まの日に隱^{かく}させ給^{たま}。豈^あ教主の日本国に生^う給^{たま}に有^あずや。大隅正八幡宮石文云、(昔靈鷲山に在^ありて妙法花經を説き、今正宮の中に在^ありて大菩薩と示^し現^{げん}す)等云云。法花經云、(今此の三界)等云云。又(常に靈鷲山に在^あり)等云云。遠^{とほ}は三千大千世界の一切衆生は釈迦如来の子也。近^{ちか}は日本国四十九億九万四千八百二十八人は八幡大菩薩の子也。今日本国の一切衆生は八幡をたのみ奉^{たてまつ}るやうにもてなし、釈迦仏をすて奉^{たてまつ}る、影^{かげ}をうやまつて体をあなづる、子に向て親をのるがごとし。本地釈迦如来にして月氏国に出^いでては「正直捨方便」の法花經を説^き給^{たま}、垂迹^{すゐ}日本国生^うては正直の頂^{たか}にすみ給^{たま}。諸の権化の人々^{このほんじ}は法花經の一実相なれども、垂迹の門^{かど}無量なり。所謂^い髮俱羅尊者は三世に不殺生戒^{しめし}を示^し、鷲嶺^{じゆりやう}摩羅生^{まらしょうじやう}々に殺生を示^しす。舍利弗外道^{はげぞう}となり、(是の如く)門々^{かど}異なる事^{こと}は、本凡夫^{もとほんぶ}にて有^ありし時の初^{しよ}發^{はつ}得道^{とくどう}の始^めを、成仏の後化他門^{けたまん}に出^い給^{たま}時、我が得道の門^{かど}を示^しすなり。妙樂大師^{みょうらくだいし}云、(若し本に從^{したが}いて説かば亦是の如し。昔殺等の惡の中に於^よて能^よく出^し離^りす。故に是の故に迹の中に亦殺を以て利他の法門と為す)等云云。今八幡大菩薩は本地^{この}月氏^{げつし}の不妄語の法花經を、迹に日本国にして正直の二字となして、賢人の頂^{たか}にやどらむと云云。若爾者^{もしからば}、此大菩薩は宝殿^{この}をやきて天にのぼり給^{たま}とも、法花經の行者日本国に

有^{ある}ならば、其所^{その}に栖^{すま}給^うべし。法華^の經^を第五^に云、[△]「諸^{しよ}天^{てん}昼^{ちゆう}夜^やに常^{じょう}に法^{ぽう}の爲^{ため}の故^{ゆゑ}に而^{しか}も之^{これ}を衛^{ゑい}護^ごす」^文。經^{きやう}文^{ぶん}の如^{ごと}く、南^{なん}無^む妙^{めう}法^{ぽう}蓮^{れん}華^わ經^{きやう}と申^{まを}人^{にん}をば、大^{だい}梵^{ぼん}天^{てん}・帝^{てい}釈^{じやく}・日^{にち}月^{げつ}・四^し天^{てん}等^{らう}、昼^{ちゆう}夜^やに守^{しゆ}護^ごすべしと見^みえたり。又^{また}第六^の卷^{まき}云、[△]「或^{ある}は己^{おのれ}身^みを説^とき、或^{ある}は他^た身^みを説^とく。或^{ある}は己^{おのれ}身^みを示^しし、或^{ある}は他^た身^みを示^しす。或^{ある}は己^{おのれ}事^{こと}を示^しし、或^{ある}は他^た事^{こと}を示^しす」^文。觀^{くわん}音^{おん}尚^{なほ}三^{さん}十^{じゆ}三^{さん}身^{しん}を現^{あらわ}じし、妙^{めう}音^{おん}又^{また}三^{さん}十^{じゆ}四^し身^{しん}を現^{あらわ}じ給^うふ。教^{きやう}主^{しゆ}釈^{じやく}尊^{そん}何^{なに}ぞ八^{はち}幡^{ばん}大^{だい}菩^ぼ薩^{さつ}と現^{あらわ}じ給^うはざらんや。天^{てん}台^{たい}云、[△]「即^{すなは}ち是^{こゝ}れ形^{かたち}を十^{じゆ}界^{かい}に垂^たれて種^{たね}々^々の像^{ざう}を作^なす」^文等^{らう}云^ん云^ん。天^{てん}竺^{ぢく}國^{こく}をば月^{げつ}氏^し國^{こく}と申^{まを}、仏^{ぶつ}の出^{しゆ}現^{げん}し給^うべき名^な也^{なり}。扶^ふ桑^{そう}國^{こく}をば日^{にち}本^{ほん}國^{こく}と申^{まを}、あに聖^{しやう}人^{にん}出^{しゆ}給^うざらむ。月^{げつ}は西^{せい}より東^{とう}に向^{むか}へり。月^{げつ}氏^しの仏^{ぶつ}法^{ぽう}東^{とう}へ流^{なが}るべき相^{さう}也^{なり}。日^{にち}は東^{とう}より出^いず。日^{にち}本^{ほん}の仏^{ぶつ}法^{ぽう}月^{げつ}氏^しへかへるべき相^{さう}也^{なり}。月^{げつ}は光^{くわう}あきらかならず。在^あ世^ぜは但^{ただ}八^{はち}年^{ねん}なり。日^{にち}は光^{くわう}明^{めい}月^{げつ}に勝^かれり。五^ご々^々百^{ひやく}歳^{さい}の長^{ちやう}闇^{あん}を照^{てう}るべき相^{さう}也^{なり}。仏^{ぶつ}は法^{ぽう}花^け經^{きやう}謗^{ぼう}法^{ぽう}の者^{もの}を治^じ給^うはず、在^あ世^ぜには無^なきゆへに。末^{まつ}法^{ぽう}には一^{いつ}乘^{じやう}の強^{ちやう}敵^{てき}充^{ちゆう}満^{まん}すべし。不^ふ輕^{きやう}菩^ぼ薩^{さつ}の利^り益^{やく}此^{こゝ}なり。各^{おの}々^々我^{わが}弟^{てい}子^し等^{らう}はげませ給^うへく[△]。

弘安三年^{太歲} 庚辰^{庚辰} 十二月^{十二月} 日

日蓮 花押

①其義は：給へし 第16紙〜第46紙初3行 富士大石寺 ②天竺國：給へく 第47紙 富士大石寺

大夫志殿御返事

たゆうさかんののごへんじ
弘安三年（二二八〇）。五十九歳。於身延。池上宗仲宛。五紙断
京都妙覚寺他四ヶ所現存（定一八五〇頁）